

## 記念号発刊によせて

著者	黒田 研二
雑誌名	社会問題研究
巻	54
号	2
ページ	1-4
発行年	2005-03
その他のタイトル	On Publication of the Commemoration Number
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/3471">http://hdl.handle.net/10466/3471</a>

## 記念号発刊によせて

大阪府立大学社会福祉学部長  
大学院社会福祉学研究科長

黒田 研 二

2005（平成17）年3月末をもって、社会福祉学部および前身の大阪社会事業短期大学に合わせて32年余奉職された里見賢治教授が退任される。また、大阪府立大学社会福祉学部・社会福祉学研究科は、大阪府立三大学の統合・再編により、2005年4月1日をもって新しい府立大学の人間社会学部社会福祉学科・人間社会学研究科社会福祉学専攻となる。本記念号はこの二つの出来事を記念し、記録にとどめるために発刊される。

\* \* \*

里見賢治教授は、1972（昭和47）年11月1日に、本学部の前身である大阪社会事業短期大学に講師として着任された。1976（昭和51）年4月には助教授に昇任され、講師・助教授を通じて8年5ヶ月、大阪社会事業短期大学に在職された。1981（昭和56）年4月1日、大阪府立大学社会福祉学部の創設に伴い、新学部の助教授とられた。1990（平成2）年4月に教授に昇任され、1993年8月以降、合わせて4期8年間にわたり社会福祉学部選出の評議員を務められた。また、1997（平成9）年8月から2001（平成13年）7月まで、2期4年間、社会福祉学部長を務められた。

里見賢治教授は、大阪大学経済学部経済学科のご卒業であり、その後、大阪市立大学大学院経済学研究科に進まれた。この経歴が示すように経済学を専門とされ、本学部では、社会保障論、福祉経済論等の科目を担当された。本学部教員の専門的背景は、社会福祉学プロパーの教員以外では、教育学、社会学、法学、医学など多様であるが、その中で、里見教授は経済学の視点から社会保障・社会福祉政策あり方を論じる第一人者として、貴重な、また非常に重要な位置を占めてこられた。里見教授の講義における理路整然とし

た語り口は、受講学生を常に惹きつけるものであったと聞いている。私自身も、本学に赴任して里見教授の著作に接し、さまざまな点で教えをいただいた。里見教授の持論でもある「自助の前提条件としての社会保障」という社会保障に基本理念に関わることをはじめ、「国民負担率」概念の批判的検討、社会保障を社会保険制度によって構成することの限界性などについてである。

里見教授は、社会事業短期大学時代の8年5ヶ月、そして府立大学社会福祉学部が創設され人間社会学部に移行する直前までの24年間、合わせて32年5ヶ月間を社会福祉学の学生教育に専心してこられた。私たち教員仲間にとって、社会福祉学部の歴史をそのまま生きてこられた里見教授は、まことにかけてがえのない存在であった。里見教授が社会福祉学部長を退いたあと、大学再編の動きは急に活発なものとなり、冒頭に記した大阪府立三大学の統合・再編計画が具体化する。里見教授は、三大学統合後の新しい大学の姿を見ずに府立大学を去られる。この時期に里見教授が退任されるのは私たちにとって大変心残りであるが、ここは襟を正して見送ることにしたい。先生には、退任後も健康に留意され、今後とも後進の指導を継続されるようお願い申し上げる。

\*        \*

振り返ると、大阪府立大学社会福祉学部は、1981年（昭和56）年4月、国公立大学最初の社会福祉学部として創立された。前身校の大阪社会事業短期大学は、日本社会事業短期大学（現、日本社会事業大学）、中部社会事業短期大学（現、日本福祉大学）と並んで当時三社大と称され、草創期以来の日本の社会福祉学界を牽引してきたが、本学部はその伝統と実績を継承し、引き続き社会福祉学教育・研究の中核を担って今日に至っている。

学部創立後の10年間は、学部の基礎を固め充実することに傾注し、満を持して1991年（平成3）年4月、学部創立10周年を期して大学院社会福祉学研究科修士課程（博士前期課程）を創設した。学部と同様に、国公立大学では最初の社会福祉学研究科であった。その完成年度に接続して1993年4月には社会福祉学研究科博士後期課程を設置し、ここに社会福祉学の教育・研究の

拠点として、一応の完成を見ることになった。なお、博士後期課程を持つ社会福祉学研究科は、本研究科が日本では最初のものであり、ここにも本学部・研究科が担ってきた社会福祉学界の牽引車としての位置が如実に表れている。

2005年4月1日の社会福祉学部から人間社会学部社会福祉学科への移行に伴い、これまでの学部としての教員体制は今後若干縮小される。また入学定員は社会福祉学部の70名から社会福祉学科では55名となる。こうした組織再編にもかかわらず、これまで大阪府立大学社会福祉学部が果たしてきた社会福祉学界における主導的役割をどこまで維持できるか。このことに強い懸念を抱く声が内外から伝わってくる。

私たちは今後、社会福祉学の教育・研究水準をさらにいっそう高めるため、次のような方向性を採ろうとしている。

第1に、大学院の教育・研究体制を整備・拡充し、さらに大学院の部局化をも視野に入れて、人間社会学研究科・社会福祉学専攻の力量の充実を図る。2005年4年より、社会福祉学専攻の博士前期課程入学定員は10名となり、これまでの社会福祉学研究科の5名から倍増する。また、教員全員が博士前期課程を担当する。こうした大学院の教育研究体制の拡充により、大阪府立大学が目指している研究型大学としての方向性を、私たちも追究する。

第2に、教育と研究の一体的な推進を目指す。研究型大学として大学院の充実を目指すことは、決して学部教育を後退させることではない。学部教育、博士前期課程・後期課程の大学院教育と研究というように、多様なレベルの教育と研究の機会を保証する。大学院では社会人入学制度を導入し、現場の社会福祉実践家のリカレント教育にも力を入れる。大学院教育を充実させることにより、同時に学部教育の質を高めることを目指したい。

第3に、学際的な教育研究の風土を定着させ、学際的な視野からさらに専門性を深く探求していくことを目指す。これまでも社会福祉学部教員の専門的背景が多様であることにみられるように社会福祉学研究は学際的視野を必要としていたが、さらに、人間社会学部・人間社会学研究科に言語文化学科・専攻、人間科学科・専攻、社会福祉学科・専攻という3つの学科・専攻が置かれることの利点を、学際的視野からの教育研究の充実に活かしていきたい。

\* \* \*

事態は否応なく進みつつある。新しく生まれ変わる人間社会学部社会福祉学科・人間社会学研究科社会福祉学専攻の舵取りを含め、新学科・専攻発展の責任は、残される私たちに委ねられたことを自覚しなければならない。

2005（平成17）年1月31日